

# 日・韓季節観の比較研究

——四季の時間的認識を中心に——

申 禮 淑\*

## はじめに

日本最初の和歌の勅撰集である『古今和歌集』の分類を見てみると、＜春歌上下＞＜夏歌＞＜秋歌上下＞＜冬歌＞＜賀歌＞＜離別歌＞＜羈旅歌＞＜物名＞＜恋歌一、二、三、四、五＞＜哀傷歌＞＜雑歌上下＞＜雑躰＞＜大歌所御歌・神遊びの歌・東歌＞という部立のもとで全20巻が分類されている。ここには、春と秋の歌がそれぞれ2巻、夏と冬の歌がそれぞれ1巻、合計6巻収められている。すなわち全20巻中6巻、30%の割合である。

51. 山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にもたちかくしつ(春歌)

人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、  
のちによみてつかはしける

479. 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ(恋歌)

51番の歌は＜春歌上＞に収められている＜読人知らず＞の歌で、479番は＜恋歌一＞に収められている＜貫之＞の歌である。両方の歌とも歌われている題材は＜山桜と霞＞である。51番の歌が、この＜山桜と霞＞を用いて、大きな春の風景をスケッチふうにご歌っている歌だとしたら、479番の歌は、春の風景を背景に男女の恋が描かれている歌といえよう。つまり、この479番の＜山桜と霞＞は、季節の設定とともに、その女性の美しさや行動の様子を暗示する＜隠喩＞的な役割をも担っている。同じ題材の＜山桜と霞＞でありながら、＜春の歌＞と＜恋の歌＞に分類されているという事は、479番の歌が目指す表現の対象は、一目見た女性への恋心であり、この場合、春という季節は、背景的なものになるという認識からであろう。そう考えれば、51番の歌が目指す表現の対象は、春そのものである、と言えるだろう。

日本の和歌や俳句は、季節と切り離しては考えられず、必ず季節感を伴うものである。季節感のない和歌を探す方がむしろ大変だろう。それに関わらず、季節の部立

\* 佛教大学非常勤講師，佛教大学総合研究所嘱託研究員(平成4，5年度)

を設定したということは、季節そのものを、＜恋＞や＜離別＞等と同格のレベルにおいて、独立した、一つの表現対象として認識していたことを示す一例であろう。この『古今和歌集』の分類は、それ以後の勅撰集にも受け継がれている。これは、日本人の文学における季節観を考える際には大事な観点だと思われる。

それでは、ここで韓国の時調集の分類を見てみよう。韓国の古代歌謡は、断片的に残存していて、一つの歌集としての形で見られるものは、1728年編纂の『青丘永言』が最初であり、これ以前にさかのぼることは不可能である。この歌集は、韓国の＜三代時調集＞の一つで、何種類かの異本がある。その中の『六堂本』の分類を見ると、24種類の曲調によって分類されている<sup>1)</sup>。また、＜三代時調集＞の残り二つは『海東歌謡』(1763)と『歌曲源流』(1876)であるが、『海東歌謡』は作家別に配列され、『歌曲源流』は異本によって異なるが、曲調によるものと、作家別によるものがある。時調はもともと＜歌曲＞から出たものなので、＜唱＞するものとして、音楽的な面と文学的な面、両方を有していた。韓国の時調集の分類はおもに音楽的な面にその重点が置かれている。勿論、韓国の時調も季節感あふれることは和歌と変わりがない。しかし、俳句のように必ず季語を要求するものではない。近代になり、時調の研究が文学的な面からの追求が増していくにつれ、主題別による分類がなされるようになる。その分類の1例をあげてみよう。六堂、崔南善は長短型の時調千余首を次のように分類している<sup>2)</sup>。

時節類(45)	花木類(40)	禽虫類(45)	老少類(54)
男女類(155)	離別類(48)	相思類(122)	遊覧類(28)
懷古類(19)	豪気類(28)	君臣類(37)	頌祝類(42)
孝道類(12)	修養類(58)	哀傷類(53)	寄托類(72)
閒情類(281)	酒楽類(132)	寺觀類(9)	人物類(72)
雑類(62)			

ここには、春、夏、秋、冬という分類の項目はもちろん見当たらない。季節の歌は＜時節類＞の中に収められている。その数は、全体の3%に過ぎない。それに、＜花木

1) その24の項目は次の通りである。

羽調	初中大葉 二中大葉 三中大葉	界面調	初中大葉 二中大葉 三中大葉	北殿 騷聳耳 栗糖数葉 蔓横	言楽 編楽 編数大葉 界楽時調 羽楽時調
羽調	初数大葉 二数大葉 三数大葉	界面調	初数大葉 二数大葉 三数大葉	言弄 弄 界面楽時調	

2) 崔南善『時調類聚』

類><禽虫類>の中にも季節の歌と分類出来るものはかなり含まれている。これは、そもそも分類の認識が日本とは違うのを表している。<花木><禽虫>ほど季節を表すものはない。日本はこれらを、季節という基準で分類し、韓国は<花木><禽虫>という、ものを基準に分類している。そして、そのようなものを有していない時調だけが<時節類>に入れられている。韓国の場合、時調を分類する際、季節を一つの枠とする認識はそもそも存在していない。それは、言い換えると、季節そのものを、独立した一つの表現対象として認識していなかったとも言えるだろう。

このように、歌の分類の認識から見ただけでも、日本と韓国の季節の認識には隔たりのあるようである。日本は、季節そのものを和歌の主題の一つとして認識しているのに対して、韓国は、季節そのものを、独立した時調の主題と認識するより、時調に常に付随するもの、という考えが強いのである。

日本も韓国も、文学の季節表現の根源は中国の漢詩にある。その漢詩の影響の元、それぞれの国においてどういう形で再生され、どのような独自性を示しているのか、を私は知りたいと思った。それを知るためには通時的に両国の文学史上の主要な作品を縦に並列していかない限り、十分な議論にはなりえない。が、ここでは、せめて現今の時点における両国の近代の作家、二人ずつを選び、彼らの作品の季節表現を対象にして、両方の間には、どれだけの特異性と類似性があるのか、を共時的に見てみたいと思う。ここで、私が選んだそれぞれ二人ずつの作家とは、日本の川端康成と夏目漱石、韓国の黄順元と金東仁である。

川端康成と黄順元は、それぞれの国において、日本的作家、韓国的作家と評価されている作家であり、まずはその二人を比較検討して見た(拙論「川端康成と黄順元、それぞれの季節——日・韓の季節観比較研究の序説として——」)(『佛敎大学総合研究所紀要』創刊号、1994)参照)。今回は、新たに夏目漱石と金東仁を加えて、四者の相互関係の中で考えてみたい。

夏目漱石は、日本の近代文学を論ずる時には欠くことの出来ない存在であり、百年前の作品でありながら、今なお現在においても、彼の作品は新鮮な感覚によって、大勢の人々の間で愛読されている。金東仁は、韓国の近代文学の設立過程と密接な関わりを持ち、大勢の研究者が韓国の近代文学の<近代性>を探究手がかりとして、彼を研究対象にしている。また、漱石(1868~1919)は明治40年代から大正初期を主な創作活動期にしており、川端康成より一時代前の作家である。一方、金東仁(1900~1951)も、主な創作活動を解放(1945)以前にしている、解放以後の作家と評される黄順元より一時代前の作家になる。このような、四人の相互関係からそれぞれの国が所有する

独自性に照明を当ててみたい。

日本と韓国の季節に関する感覚を考えるためには様々な角度からのアプローチが必要である。どのような時間的感覚で四季を区切っているのか、それぞれの季節を描写する題材にはどれだけの共通性と特異性があるのか、それぞれの季節に対する感性はどういう違いを見せているのか、等々。一年中見ている〈空〉の描写を見るだけでも、四人の作家の個性はもちろん、それぞれの国が持っている独自性が見られる。例えば、〈空〉を見て秋の訪れを感じるのは、両国とも似ているが、川端と漱石が主に描く秋の空は〈秋の夜空〉で、深みをおびた空に、月や星を見、そこから秋気を感じるものが多い。一方、黄順元と金東仁は、雲一点のない澄み切った、高い、青い空、つまり昼間の〈青い秋空〉を見て秋を感じているのである。このような、細かいものを一つ一つ検討した上で両国の季節観を論ずる誘惑にかられる。しかし、ここでは、両国の、〈四季を区切る時間的感覚はどうであろうか〉という一点に、その論点を絞って検討して見たいと思う。

## 1. 夏目漱石の四季観

夏目漱石の長編、「三四郎」「それから」「門」「行人」「明暗」を対象に季節の表現を調べ、作品時間の順序で並べて見ると、季節の変わり目が自ずと見えてくる。それを以て漱石の四季を区切る時間的感覚を探って見たい。まず、春から見てみよう。

- ①陰刻な冬が彼岸の風に吹き払われた時自分は寒い<sup>あなぐら</sup>簀から顔を出した人のように明るい世界をながめた。(略)呼吸をするたびに春のにおいが脈の中に流れ込む快さを忘れるほど自分は老いていなかった(「行人」塵労)。
- ②その日は朝から曇っていた。しかも打ち続いた好天気を一度に追い払うように寒い風が吹いた(「行人」塵労)。
- ③「もうじき花が咲くね。」(略)その日はこの間とは打って変わって、青春第一日ともいうべき暖かい光を、南へ回った太陽が自分たちの上へ投げかけていた(「行人」塵労)。
- ④梅がちらほら眼に入るようになった。早いのは既に色を失って散りかけた。雨は煙るように降り始めた。それがはれて、日に蒸されるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新たにすべき湿気がむらむらと立ち上った。背戸に干した雨傘に、小犬がじゃれ掛かって、蛇の目の色がきらきらする所に陽炎が燃える如く長閑に思われる日もあった(「門」二十三)。

①, ②, ③は同じく「行人」のものである。①を見ると、「彼岸の風」によって「陰刻な冬」が去り, 「明るい」春が訪れたとしている。②の作品時間は, <彼岸の中日>の次の日である。「続いた好天気」が寒い風でまた後退りしたことが分かる。③は, ②の時点から6日後の日である。「この間」というのが, ②の日のことである。そうすると, ①が<彼岸入り>, ②が<彼岸の中日>, ③がその6日後で, その間10日余りの日数である。「春のにおい」のする暖かい好天気と, 「寒い風」でまたもや遠退いてしまう<初春>の情景である。徐々にしかも確実に近づいて来る春がよく表現されている。

④は, 「春の記憶を新たにすべき」ということから, 春の始まりの時期と思ってもいいだろう。「梅の花」「煙るような雨」「陽炎」などから, ①の時間とほぼ同じかすこし早い時期であろう。

こうして見ると, 漱石の春の訪れは, <彼岸>と結び付いていることが分かる。そうすると, <彼岸入り>が, 3月の17, 8日頃であるから, 漱石の春の始まりは, <3月の中頃>と言っていいと思われる。

次はいつから夏を意識しているのか, を見てみる。

⑤もっともその日はたいへんいい天気で, 広い芝生の上にフロックで立っていると, もう夏が来たという感じが, 肩から背中へかけて著しく起こったくらい, 空がまっさおに透き通っていた(「それから」五)。

⑥その日はかわいた風が朗らかな天を吹いて, 青いものが目に映る, 常よりは暑い天気であった。朝の新聞に菖蒲の案内が出ていた。(略)あとから席に導かれた平岡を見ると, もう夏の洋服を着ていた(「それから」八)。

⑦いつのまにか, 人が絹の羽織を着て歩くようになった。二三日, 宅で調べ物をして庭先よりほかにながめなかった代助は, 冬帽をかぶって表へ出てみて, 急に暑さを感じた。自分もセルを脱がなければならないと思って, 五六町歩くうちに袷を着た人に二人出会った。そうかと思うと新しい氷屋で書生がコップを手にして, 冷たそうなものを飲んでいた(「それから」十一)。

⑧月が変わって世の中が青葉で包まれ出してから, 振り返ってやり過ごした春をながめるとはなはだ物足りなかった(「行人」塵労)。

⑤, ⑥, ⑦は「それから」の引用である。⑤の「夏」は, 「それから」の作品時間において最初に登場するものである。「それから」の冒頭の時間が, <イースタ>の2, 3日後で, ⑤は, そのおよそ2週間後と考えられるので, 4月の20日頃であろう。暑さがかなり強調されているが, 「もう夏が来たという感じ」がすることは, <

もう夏が来た>とは、その意味合いが多少違ってくると思われる。ここでは、夏が来たような暑い日差しを表現したものと理解した方がいいようである。⑥は、⑤から1週間か、10日経過した時間で、「菖蒲の案内」が新聞に出ていることから推察すると、5月に入って間もないと思っていいだろう。「青いものが目に映」り、「暑い天気」の日で、平岡は「夏の洋服」を着ている。⑦を見ると、通りを歩く人たちは、「絹の羽織」や「袴」を着ているし、街には「氷屋」が出ている。完全な夏の到来を描いている。⑥から約3週間の時間が経過しており、5月の終りか、6月の初め頃であろう。⑥と⑦との間には、茂っていく青葉を描いた場面が多くある。すると、⑦の時点ではもう夏は来ているのであり、夏の始まりは、⑥の時点、青葉が目に映る新緑の時期、つまり、5月の初め頃と言っていいと思われる。実際、⑧のように、「世の中が青葉で包まれ」る時期に「過ぎ去った春」を振り返っている場面が「行人」にある。「月が変わって」の月は、5月のことであり、つまり、5月に入って、青葉が目立って来ると、もう春は終わったという認識が明確に示されている。このように、漱石が、夏を意識し、夏の始まりと認識したのは、<5月の初め>と考えていいと思われる。

それでは、秋はどうであろうか。

漱石は川端と違い、秋の訪れがとても遅いのである。「行人」の兄、兄嫁、母親、二郎の四人が出掛けた、<和歌の浦>の旅行の場面には、至る所で「暑い、暑い」を繰り返している。そして、<和歌の浦>に着いた次の朝、兄と二人で出かけた場面では、「そのところどころに背の低い松がかじりつくように青味を添えて、単調を破るのが、夏の目にうれしく映った」という文があり、まだ夏という意識である。しかし、この作品時間は、もう9月に入っているのである。あの有名な二郎とお直の、和歌山での二人きりの暴風雨の夜が、「ちょうど旧暦の盆」で、兄と出かけた日は、この日の2日前である。旧暦の盆と言えば、年によって少々ずれても、9月の10日より早くなることは滅多にない。そうすると、漱石は9月10日頃にもまだ夏という意識を持っていたことになる。そして、また「三四郎」からもそういう傾向は見られるのである。「三四郎」の冒頭部分の時間は8月の末か、9月に入ったとしても、1、2日の時期である。その東京への上京の列車の中で爺さんが「汗を拭」く場面だとか、「暑い時分だから町はまだ宵の口のように賑やかだ」と描写している、その夜の名古屋の街の様子からうかがえるように、まだまだ暑い夏なのである。

このように、漱石は9月の残暑をとて強調し、それもまだ夏だという意識を持っていた。これは、川端が立秋から秋を意識し、お盆の送り火を見ながら秋気を感じて

いる感覚とは、かなりの隔たりを見せている。

すると、漱石が秋を感じるのはいつからなのか。

⑨そのうち夏も次第に過ぎた。宵々に見る星の光が夜ごとに深くなって来た。梧桐の葉の朝夕風に揺らぐのが、肌にこたえるように目をひやひやとゆすぶった。自分は秋に入ると生まれ変わったように愉快的気分を時々感じ得た(「行人」帰ってから)。

⑩庭の先で虫の音がする。一人で座っていると、淋しい秋の初めである(「三四郎」三)。

⑨は、<和歌の浦>の旅行から帰ってからしばらく間があるので、10月に入っていると思われる。⑩は、轢死事件のあった夜の描写で、10月半ば頃である。「星の光が夜ごとと深」くなり、「朝夕の風」を肌で感じ、「虫の音」を聞くことで秋を感じるのは、川端と変わらないが、その時期が、川端は8月の10日頃であり、漱石はこのように10月入ってからである。それも、⑩に見えるように、「秋の初め」という感覚を持っている。漱石にとっては九月の残暑はまだ秋とは言えないものであって、秋は、10月に入った時点で感じるのである。したがって、漱石の秋は、<10月の初め>から始まると言えるだろう。

次は、冬について見てみよう。

⑪月の冴えた比較的寒い晩である。(略)高い月を仰いで大きな声を出して笑った。(略)三四郎はそれで冬観衣を買おうと思った(「三四郎」九)。

⑫梧桐が坊主になったある朝、(略)彼の室は明るい電灯と、暖かい火鉢で、初冬の寒さから全然隔離されているように見えた(「行人」帰ってから)。

⑬年は宗助夫婦を駆って日ごとに寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆売の声が、瓦を鎖す霜の色を連想せしめた。宗助は床の中でその声を聞きながら、また冬が来たと思い出した(「門」七)。

三つの作品ともに、本格的な「寒さ」を感じることから冬の訪れを意識している。その時期は、上にあげた三つとも、作品の時間から見ると、12月に入っているのである。「三四郎」の⑪の場面の前に、11月の「晦日近く」という時点で、「曇った秋の日」という表現がある。すると、漱石は11月の終り頃までは、まだ<秋>という認識をもっていたようであり、冬の始まりは、やはり、<12月に入ってから>と言っているだろう。

以上のように、漱石の作品からどういう時間的配分の中で四季というものが描かれているのか、を調べて見た。その結果、春は3月の中頃、夏は5月の初め、秋は10月

の初め、冬は12月の初めからそれぞれの季節を表現していることが分かった。言い換えれば、これは、漱石の四季を区切る時間的感覚を浮き彫りにしているものである。つまり、漱石は、＜3月中頃＞から春、＜5月の初め＞から夏、＜10月初め＞から秋、＜12月の初め＞から冬、という認識をもって四季を表現していたと言えよう。

## 2. 川端康成と夏目漱石の距離

それではここで、川端康成と夏目漱石の四季観を見比べて、どのような共通性と相違性を示すのか、をみてみよう。まずは、川端と漱石の、四季の認識の時期を並べると次の表になる。

川端と比べ、漱石の方は、春と冬を認識する時期が少し遅れている。反面、夏の認識は逆に早い。その両者の時間的差は、10日から半月である。この位の

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
川端康成		冬	三月初め	春		五月中旬	夏		八月十日頃	秋		十一月中旬 冬
夏目漱石		冬	三月中旬	春	五月初め		夏			十月初め	秋	十二月初め 冬

ずれは個人差として処理しても問題になるほどのものではない。しかし、問題は秋の認識の時期的ずれである。川端が、8月10日頃(立秋頃)すでに秋の気配を感じようとしているのに、漱石は、秋の特色が顕著に現われた10月に入って、初めて秋と認識している。その間、1か月半のずれが生じている。これは、二人の個人的な時間のずれと理解するにはあまりにも差があり過ぎる。これは、両者の、季節を認識する根本的な姿勢の違いが示した結果なのではないだろうか。

前回の拙論で、川端康成の四季の区切りを調べた結果、彼の四季の区切りの時期が、ほぼ暦上の、立春、立夏、立秋、立冬と重なることを指摘した。そして、川端康成の季節感は、実際に感じる季節というよりも、もっと観念的な要因によって支配されているものと論じた。その代表的なものとして、「山の音」の＜一月の熱海の春景色＞と「古都」の＜お盆の送り火から秋を感じる＞場面をあげた。つまり、川端は、立春という意識に引っ張られ、暖かい土地の熱海を設定して春景色を描き、立秋を意識した故に、夏の真っ盛りの8月中頃秋の訪れを感じているのである。

それでは、漱石にはそういう要素はないのであろうか。

⑭演芸会は比較的寒い時に開かれた。年は漸く押し詰って来る。人は二十日足らず



の眼の先に春を控えた。市に生きるものは、忙しからんとしている(「三四郎」十二)。

- ⑮この寒さを無理に乗り越して、一日も早く春に入ろうと焦慮するような表通の活動を、宗助は今見て来たばかりなので、(略)正月を眼の前に控えた彼は、実際これという新しい希望もないのに、徒らに周囲から誘われて、何だかざわざわした心持を抱いていたのである(「門」十三)。

この二つの文章には、正月を迎える巷の、師走の忙しさや騒つきがあり、本格的になってきた寒さがある。ここで、漱石は正月を迎えることを、春を迎えることと認識している。つまり、<正月=春>なのである。⑭の<春>は、<正月>ととって差し支えない。⑮の<春>は、必ずしも<正月>とは言えないかも知れない。が、正月を眼の前にした時期であり、⑬の例文のことをふまえると<正月>を指していると理解していいと思う。この漱石の<正月=春>の認識は、すなわち、立春のことを意識しているからこそ発生したものである。太陰太陽暦において立春は、正月とともに来るのである。この時の正月はもちろん旧正月のことである。しかし、漱石の<正月=春>の正月は太陽暦の正月である。漱石は、正月が来ると当然立春がともに訪れ、そこから春が始まるという、古来からの季節感を、そのまま受け継いでいる。しかし、旧暦の正月は、太陽暦でいうと、2月の初め頃で、漱石の正月(1月1日)とは、一ヶ月弱の時間的ずれが生じている。2月の初めなら、徐々に春に向っていくだろうが、1月からだと、ますます厳しい寒さが襲ってくる時期である。それに関わらず、漱石の寒さの描写は、正月を迎えるまでにそのピークをなし、正月が過ぎると寒さを表現するより、春のイメージを追いかけている。

- ⑯見事な白い牡丹が活けてあった。(「門」十六)。

- ⑰薔を圧する杉の色が、冬を封じて彼の後に聳えた(「門」二十一)。

- ⑱花活にはどこで咲いたか、もう黄色い菜の花が挿してあった(「門」二十二)。

⑯が1月7日、⑰が1月中旬、⑱が1月末の時期である。正月を過ぎて春を迎えたが、1月の寒さでは<春>とは言えない。しかし、「白い牡丹」「黄色い菜の花」、ここには十分に春のイメージ、春の意識が表現されている。しかし、漱石が実際に皮膚的感覚で春を迎えるのは、これより2ヶ月先の3月中頃なのである。

こうして見ると、春を迎えるパターンとして、川端康成と夏目漱石の間には、共通点があることが分かる。川端は、<正月=春>の認識は示さなかったが、正月過ぎに熱海の春景色を描き、「別世界の春」と言っている。つまり、川端も漱石も、立春が過ぎると<春>という認識を持っている。しかも、漱石の場合は、その立春が正月と

重なり合っているのである。すなわち、川端も漱石も、現実的には最も寒い1月に、その寒さを実感するより、先取りした春を描く姿勢を取っている。これは、二人とも、和歌や俳句の規範的な季節感の影響のもとで春を認識し、また表現していると言っていると思う。

それでは、秋にはどういう認識の違いが見られるのか。

先にも言った通り、川端の秋は、立秋とともに認識され、暑さの中でその感覚は常に秋を感じさせるものを追いかけている。

①⑨むし暑いので起き出して、雨戸を一枚あけた。そこにしゃがんだ。月夜だった。

(略)八月の十日前だが、虫が鳴いている。木の葉から木の葉へ夜露が落ちるらしい音も聞こえる(「山の音」)。

「八月の十日前」というのは、立秋(8月7、8日頃)のことを念頭においての時間であろう。現実には「むし暑」い。しかし、「虫」が鳴き、「夜露」が落ちるという発想は、確かに秋を意識したものである。そして、

②⑩送り火のついた山の色、そして夜空の色に、千重子は初秋の色を感じる(「古都」)。

のように、<8月16日>には「初秋」の感覚でいるのである。一方、漱石は9月に入っても次のようである。

②⑪その晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪って来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼みながら、小六の事を話した。暗がりでは団扇をはたはた動かした(「門」)。

川端の、<八月十日前>の日と同じく、夜の情景である。縁側で「涼」んでいる二人、団扇をはたはた動かすこと、この状況から秋の意識を読み取ることは難しいと思う。9月に入ってからでも<残暑の暑さ>を強調しているのは、「行人」「三四郎」からも指摘できる。そして、川端が、①⑨のように「夜露」を秋の感覚で用いているのに対して、漱石の<露>は少しその意味が異なっている。

②⑫晩には門野を連れて、神楽坂の縁日へ出かけて、秋草を二鉢三鉢買って来て、露のおりる軒の外へ並べて置いた(「それから」)。

②⑬あいにく目がさえてゆうべよりはかえって寝苦しかった。そのうち夏の夜がぼうと白み渡って来た。代助はたまりかねてはね起きた。はだして庭先へ飛びおりて冷たい露を存分に踏んだ(「それから」)。

②⑭自分は露に近い縁側を好んでそこに座を占めていた(「行人」)。

②⑮手頃な花物を二鉢買って、夫婦して一つずつ持って帰って来た。夜露に中てた方

がよかろうというので、崖下の雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた(「門」)。

②⑥夫婦は毎朝露の光る頃起きて、美しい日を廂の上に見た(「門」)。

②⑦やがて客は謡本を風呂敷に包んで露にぬれた門をくぐって出た(「行人」)。

以上の六例の〈露〉をあげて見た。②と③は、7月の半ば、④は8月の末か、9月の初め頃、⑤は9月の半ば、⑥と⑦は10月に入っている。〈露〉〈夜露〉は〈秋の季語〉である。漱石は俳句を嗜み、彼の俳句は数多く残されている。〈露〉〈夜露〉が〈秋の季語〉であることを知らない漱石ではない。しかし、この六例の〈露〉を見ると、とても秋のイメージとは言えない。③には、明確に「夏の夜」とし、その「夏の夜」の「冷たい露」なので、ここでの〈露〉の意味は秋を暗示するより、〈湿る〉という意味になろう。この6例の内、秋のイメージを持っているのは、⑥と⑦位であろう。他は、〈湿る〉という意味合いで使われている。一方、川端は、「夜露」を秋の代名詞である「月夜」「虫の音」とともに用いている。つまり、川端の意識では、「夜露」という言葉は〈秋のイメージ〉なのである。しかし、漱石にとっては〈気温の差によって出来る水滴〉の意味に過ぎないのである。同じ〈露〉を描写しながら、川端は、〈露=秋〉という〈歳時記的季節〉の概念を用い、漱石は、自然現象としての露の概念を用いているのである。要するに、〈露〉は気温の差によって発生するもので、秋に限られるものではない。しかし、従来からの日本文学での〈露〉、すなわち、〈歳時記〉の世界での〈露〉は、〈露=秋〉という規則になっている。日本には「歳時記」を軸とする〈規範とすべき〉季節観が存在する。すなわち、川端は、〈歳時記的な季節〉の概念のもとで〈露〉を描写、漱石は、〈自然現象〉として〈露〉を描写していると言えよう。この〈露〉に対する認識の違いこそが、川端と漱石の秋の認識の違いにも繋がっているのである。つまり、川端は、日本の〈規範的季節〉すなわち〈歳時記的季節〉の感覚によって秋を認識している一方、漱石は、その〈規範的季節〉に捉われず、自らの体感的な感覚で秋を捉えているのである。日本が〈模範的季節〉としている〈歳時記的季節〉は、四季を立春、立夏、立秋、立冬で区切っていることは周知の通りである。しかし、この区切りは中国大陆を基準にしているものなので、日本の実際の気候との間には時間的ずれが生ずるのである。そのずれが一番顕著に現われているのが、春と秋なのであろう。そこで、春の認識においては、川端も漱石も、〈立春〉という概念に捉われていることを見い出すことができる。しかし、秋の認識においては、両者は異なる立場を取っている。川端は、〈立秋〉の概念的な時間を基準に秋を認識している反面、漱石は、〈立秋〉という概念的な時間より、忠

実に自分の体感的な感覚に基づいて秋を認識している。川端と漱石の、秋を認識する時間があれだけの時間的差をもたらした原因はこの両者の、秋の認識する基本的な基準が異なっていたからである。

以上のような、川端と漱石の季節認識を見ると、そこには二つの異なる基準があると思われる。すなわち<歳時記的季節認識>と<体感的季節認識>の二つである。川端は、四季全般において<歳時記的季節認識>に基づいて四季を認識している反面、漱石は、<体感的季節認識>と<歳時記的季節認識>の両面に基づいて四季を認識している。上で述べたように、漱石の春の認識には、川端同様<歳時記的季節認識>が明確に現われている。が、秋の認識には、どこまでも<体感的季節認識>によっている。つまり、漱石は、<体感的季節認識>と<歳時記的季節認識>の両面が混在した季節認識を持っていると指摘できよう。

### 3. 金東仁の四季観

金東仁の季節表現を調べて、まず言えることは、季節を表現した部分がとても少ないということである。それも、「秋になった」「次の年の春になった」「秋が深くなって来た」という用い方で、ほとんどが時間の経過を示すものとして使われている。じっくりと季節そのものを描いたものは数少ない。その上、季節の描き方は、徐々に変わっていく変化を描写する姿勢よりもむしろ、それぞれの季節が持つ特徴をもってその季節を表現している。その点では、彼の季節表現からは、彼がそれぞれの季節そのものにどのようなイメージを持っていたのか、を知る手がかりとしてはいい材料になる。が、四季をどのような時間的感覚で区切っているのか、を探るものとしてはやや不適切な面もある。その面を踏まえた上で、およその傾向を探ってみる。

それでは、春から見てみよう。

(a)나는 잠시도 멎지 않고 푸른물을 황해로 부어 내리는 대동강을 향한 모란봉기슭, 새파랗게 돌아나는 풀 위에 덩굴고 있었다.

이 날은 삼월삼짇날, 대동강에 첫 뱃놀이하는 날이다. 가-망게 내려다 보이는 물 위에는 겹겹이 반짝이는 물결을 푸른 요리배들이 타고 넘으며 거기서 봄향기에 취한 형형색색의 선율이 음단보다도 보드라운 봄 공기를 흔들면서 날아온다. (생략) 대동강에 흐르는 시커먼 봄물 청류벽에 돌아나는 푸르른 풀어음 (풀음) 심지어 사람의 가슴속에 봄에 뛰노는 핏줄기까지라도 습기 많은 봄 공기를 다리 놓고 떨리지 않고는 두지 않는다. 봄이다. 봄이 왔다 (「배따라

き」).

私は、寸時も絶えず青い水を黄海にそそぐ大同江に向った牡丹(モラン)峰の麓、青々と生えている草の上に寝転んでいた。

この日は3月3日、大同江の船遊びが始まる日なのだ。遙か見下ろす水面には、光り輝く波に、青い料理船が揺れていて、そこから春の香に酔った様々な旋律が、絨毯よりも柔らかい春の空気を揺さぶりながら流れて来る。(略)大同江を流れる蒼黒い春の水、清流壁に生えている青い草々にも人間の心臓にも、春で躍動する血潮にまでも、湿気を帯びた春の空気を伝って、旋律は流れ込んでいる。

春だ。春が来た(「ベトラギ(離船楽曲)」)。

(b)봄이 이르렀다. 흥악한 일기와 순서, 고르자 못한 한서의 긴겨울이 지난 뒤에는 이 장산에도 봄의 다스한 별이 비치었다(「젊은 그들」)。

春が訪れた。凶悪な天気と寒暑の秩序の乱れた長い冬が通り過ぎた後には、この江山(国)にも春の暖かい陽射しが照り注いでいた(「若い彼ら」)。

(a)を見ると、<流れる川の水>、<青々と生えてくる草>、<包むように柔らかい空気>、至る所から春の訪れを発見し、<人間の血潮>までが春の興奮で躍動している。そこで実感として「春だ。春が来た」と叫んでいる。この日は、大同江の舟遊びの解禁日となっている<3月3日>である。しかし、金東仁のほとんどの作品の時間は、太陰太陽暦を使用しているので、この日は日本の<旧暦の桃の節句>にあたる日である。従って、今の太陽暦にすると、4月の初め頃になる。(b)も長い冬が終り「暖かい陽射し」とともに「春が来た」としている。この時間も、旧暦の3月の初めなので、太陽暦では4月の初め頃になる。このように、金東仁の春の認識は、旧暦の3月初め、つまり、太陽暦の4月初めと考えることができよう。

それでは、夏はどうであろうか。明確に夏の始まりと断定出来るものは作品から見出せない。しかし、いくつかの作品を合わせて考えると、大体の時期が分ってくる。まず、「若い彼ら」の中に、「夏の日」なので、障子を開けっ放しにしていると描写している所がある。それは、作品の時間で辿ると、旧暦の<5月16日>以後である。「目がやっと開いた時」には、旧暦<4月8日>から<5月5日>までの約1か月が作品時間として設定されている。つまり、<お釈迦の誕生日>から<端午の日>までである。その1ヶ月の内、「行く春を惜しむ」という場面と、「初(はつ)夏」という言葉が出ている。「行く春を惜しむ」のは、<4月8日>を過ぎてしばらくの時点であるし、「初夏」の認識は<端午の日>に近い時点である。「笞刑」に次のような描写がある。

(c)아직 아침은 서늘할, 유월 중순이다. 칼렌다가 없으니 날짜는 똑똑히 모르지만 음력 단오 좀 지난 때이다. 하루종일 받은 열을 모두 방산한 아침은 얼마간 서늘하다 (「笞刑」).

まだ朝のうちは涼しい, 6月の中旬だ。カレンダーがないので日付ははっきりしないが, 陰暦の端午を少し過ぎた時期だ。一日中照りつけた熱をすべて放散した朝はいくらか涼しいのだ(「笞刑」)。

この時間は, 「6月中旬」すなわち「端午を少し過ぎた」時期である。「朝の内はまだ涼しい」が, 昼間はかなり暑いことを暗に示している。この感覚は, <初夏>のものと見ていいと思われる。以上のものを合わせて考えると, 金東仁の夏の認識は, <端午の節句>と結び付いているのが分かり, この<端午の節句>を境に夏を認識していたと言えるだろう。この<端午の節句>は, 日本が太陰太陽暦の<5月5日>をそのまま太陽暦<5月5日>に当てているのとは違って, 韓国では, 太陰太陽暦の<5月5日>なので, 太陽暦では, <6月10日>頃になる。

次は秋であるが, 用例が少ないため, 彼がいつから秋を意識しているのか, を辿ることはむずかしい。が, 少なくとも次の, <10月9日>の描写では, 秋たけなわである。

(d)무르익은 벼와 수수 내음새는 약한 바람이 풍겨서 이삭들이 서로 쏘리는 약한 소리와 함께 K에게로 날아온다. 보통의 넓은 벌을 기러기는 남향하여 건너간다 (「마음이 열린 者여」)。

熟れた稲と黍の匂いは弱い風によって, 穂先が擦れ合うかすかな音とともにKに飛んで来た。普通の広い野原を雁は南に向って渡って行く。(「心の弱い者よ」)  
それでは, 冬はどうであろうか。まず, 「11月半ば頃」にうっすらと初雪が降った箇所から出発してみよう。

(e)첫눈——얇게 온 이튿날 가기 싫다는 다리를 억지로 끌고 뒷뒹로 향하였다.

얇게 왔던 눈은 거반 녹아서, 우묵우묵한 데만 희게 장식하고 두드러진 데는 새 빨간 흙이 나타나 있다. (「마음이 열린 者여」)

初雪——薄く降った次の日, 行きたくないという足をむりやりに引っ張って裏の墓地に向った。うっすらと降った雪は, ほとんど解けて, 窪んだところにだけ白く, 他は, 赤い土が出ていた(「心の弱い者よ」)。

<雪>が冬の代名詞であることを考えると, これは<冬>の表現と取るべきであろう。しかし, この前後を読んでも寒さに対する意識も, これから冬に入ると認識もまったく読み取れない。

それでは、＜晩秋から冬へ＞とその作品時間が設定されている短篇「遺書」を丹念に見てみたいと思う。

(f)서늘한——이라는 것보다 오히려 추운 바람이 성 밖에는 불고 있었다. 남쪽과 북쪽에 막혀 있는 뫼들도 푸른빛은 다 잃고 인제는 갈색 잡풀이 찬 가을바람에 거울거릴 뿐이다 (「유서」).

涼しい——というよりむしろ寒い風が城外に吹いていた。南と北の方を塞いでいる山も青味を失い、今は茶色の雑草が冷たい秋風に揺らいでいるばかりだ(「遺書」)。

(g)저一편에 보이는 잎이 다 떨어져서 겨꾸로 세워 놓은 것 같은 포플러—는 바람에 남쪽으로 기울거리고 있었다. 뫼 아래로 보이는 빈민굴에서도 겨울이 이르렀다고 새로 하얀 종이를 바른 문을 굳게 닫고들 있었다 (「유서」).

あそこに見える葉がすべて落ちて、箒を逆様に立たせて置いたようなポプラは、風に南へ傾いて揺れていた。山の下に見える貧民窟にも冬が来たと新しく張り替えた白い障子を固く閉ざしていた(「遺書」)。

(f)には「秋風」、(g)には「冬」という言葉があり、この(f)と(g)との境を＜冬＞の始まりと言っていいと思う。しかし、作品時間から(f)と(g)の日付を明確に探り出す手はない。ただ、(g)の文の前日、「太鼓を叩く救世軍」をながめる場面が出ている。歳末に街道に出る＜救世軍の慈善なべ＞のことであろう。また、(g)の文の10日余り後に「クリスマスが近付いたある日」という時間が示されている。すると、(g)の時期は、12月に入っていることはもちろん、10日後にはクリスマスが近付いているから、＜12月10日頃＞になると思われる。そして、(f)と(g)との間の時間が約10日間なので、(f)の時間は＜11月末＞と考えられる。すると、この「遺書」においての＜冬＞の始まりは12月に入ってからとなる。

「心の弱い者よ」では、「11月の半ば」に「初雪」を描き、「遺書」では、＜11月末＞に「秋風」を描いている。これ以上用例がないので、金東仁の認識を正確に探り出すことは不可能であるが、11月半ば以降、12月初めまでのある時点が冬の始まりの時間になることは間違いない。金東仁の冬の表現を見ると、＜雪＞と＜骨にまでしみ込む冷たい風＞がその表現の主流をなしている。そして、その寒さを描いている時期は、陰暦の12月と正月とに集中していて、太陽暦で言うと、12月の半ばから2月初め頃になる。このような冬のイメージから考えると、寒さが増して来る12月に入ってから冬を認識した可能性の方が強いのではないと思われるのである。

以上のように、金東仁の季節表現は、春は4月の初め(桃の節句)、夏は6月の初め

(端午の節句), 秋は明確に時期を定めることが不可能, 冬は12月の初め, からそれぞれの季節が始まることを示している。多数の用例によるものではないので, 多少の揺れは残るものの, この四季の区切りを一応金東仁の季節の認識として理解してもよいと思われる。

#### 4. 黄順元と金東仁の距離

それではここで, 黄順元と金東仁の, 四季の認識を比べてみよう。まず, 両者の時間的認識を表で比べると次のようである。

この表から見ると, 両者の四季に対する時間的認識にはそれほど隔たりは見えないことが分かる。半月程度の差は, 個人的な趣向の違いによるものであ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
黄順元				三 月 中 旬			六 月 末			九 月 初 め		十 二 月 初 め
金東仁				桃 の 節 句			端 午			(秋 夕)		十 二 月 初 め

ろう。例えば, 春の場合, 黄順元は初春を好んで描いている反面, 金東仁は春爛漫の時期をおもに描写していることから来る差である。基本的には, 両者は似通った認識の元で四季の時間を表現していると言えよう。それでは, その似通った認識は何が基準になっていたのだろうか。

黄順元が描く四季とは, 氷が解けるのを見て春を, 照りつける陽射しから夏を, 心地よい涼しい風を肌で感じることから秋を, 凍える寒さから冬を, それぞれ感じ, またそれを描くことで四季を表現している。つまり, 徹底的な体感的感覚による季節認識である(前出の拙論)。これは, 金東仁においてもそれほど変わらないのである。強いて言えば, 金東仁の春は, 氷の解ける春よりは, 花咲く春のイメージが強いという程度のもので, 黄順元同様, 体感的感覚による季節認識であることには変わらない。

それでは, 黄順元と金東仁の体感的感覚はまったく個人の主観的な感覚なのであるか。その主観的でありそうな体感的感覚にも, その社会が共有する概念的要因が影響していることは否定出来ないと思う。

(h)다사다난한 계해년이 지나고, 갑자년 춘정월——。

유난히도 명량한 날씨. 한 조각의 바람도 없고 겨울날이라 해도 따스한 별이 골고루 내려 비치고 있었다. 두어 조각 분홍빛 구름이 백악 위에 걸려서 이명



량한 날씨를 더욱 곱게 장식하고 있었다.

갑자기 따사로워진 일기 때문에 집집 마다 추녀에서는 눈 녹은 물이 땅을 적시고 있었다 (『雲峴宮의 봄』).

多事多難の癸亥年が過ぎて、甲子年の春正月——。

とても明るく朗らかなお天気。風も全くなく、冬だといっても暖かい陽射しが隈無く照り注いでいた。ほんのりと桃色かかった雲が白岳の上にかかって、この朗らかなお天気をますます華やかに装飾していた。急に暖かくなった気候で家々の軒下には雪解け水が土を濡らしていた(『雲峴宮の春』)。

- (i)정월 부터는 봄이라 하되 이름이 봄이지 이월 중순까지도 날이 출기가 여간이 아니었다. 아침 저녁은 커녕 낮에도 흑흑 쏘는 바람이 나뭇 등걸에서 노래하고 있었다. 길이며 뜰에 널린 나무 부스러기며 종이 조각들이 이리저리 날아다니고 있었다 (『雲峴宮의 봄』)。

正月からは春だというのが、名ばかりの春で2月の中旬までも寒さは厳しいのだ。朝晩はもちろん昼間にも刺すような風が木の枝で歌っていた。道端や庭に落ちている落葉や紙くずがあちこちに飛びかっていた(『雲峴宮の春』)。

この例文を見ると、金東仁にも、漱石と同様<正月=春>の認識があったことが分かる。しかし、彼は(h)のように<正月=春>の概念をそのまま受容するとともに、(i)のように全面的に否定もしている。実際の彼の冬の季節表現から見ると、正月過ぎ、2月までが最も寒さの厳しい時期として描かれているので、金東仁にとっては<正月=春>は概念的な知識の一つで、実感としてはその概念が受容出来なかったと思われる。韓国にも日本と同様に立春、立夏、立秋、立冬をもって四季を区切る概念が存在する。しかし、金東仁は今見た通り<正月=立春=春>の概念を否定し、実際彼の季節表現からもその影響は見いだせない。そして、上であげた表を見ても、黄順元と金東仁、両者が四季を認識する時期と、立春、立夏、立秋、立冬の時期とは少なくとも1ヶ月のずれがある。すると、黄順元と金東仁の四季の認識は、立春、立夏、立秋、立冬のような、暦による区切りにはあまり捉われていないことが分かる。その反面、金東仁は<桃の節句>から春を、<端午の節句>から夏を認識している。また、黄順元の秋は<秋夕(日本の旧盆)>と結びついていて、両者とも冬の描写には必ずクリスマスが登場する。つまり、黄順元と金東仁は、暦上の概念的な季節より、<桃の節句><端午の節句><秋夕><クリスマス>のように、生活と深く関わりを持つ節句、名節(伝統的に毎年決めて守る日、主に正月と秋夕を言う)をもって四季を認識していたと言えよう。要するに、黄順元も金東仁も、<体感的季節認識>に基づいて四

季を表現している。自らの感覚で感じる季節は、暦上の季節より約1ヶ月遅れた時点で認識でき、そこには、生活と関わる節句や名節があるので生活的感覚から来る季節感とも結びついて四季を認識していると思われる。

### 結びに——日本的認識，韓国的認識

川端と漱石の四季観と、黄順元と金東仁の四季観、から日本的、韓国的と言えるものは何であろうか。川端と漱石が代表する日本は、＜歳時記的季節認識＞と＜体感的季節認識＞の二本立ての季節認識があり、一方、黄順元と金東仁の韓国は、＜体感的季節認識＞をしていることが分かった。このような、認識から生まれた四季の時間的認識を四者並べて見ると次のようになる。

この四者の四季の時間的認識の上に、立春、立夏、立秋、立冬を加えてみると、日本の季節認識が、韓国の季節認識より立春、立夏、立秋、立冬を意識した認識であることが瞭然と分かる。つまりこれは、前で漱石の季節認識は＜歳時記的季節認識＞と＜体感的季節認識＞とが混在したものであると論じたが、韓国と比べて見ると、日本の季節認識は＜歳時記的季節認識＞がその主流であることを表すものと言えよう。反面、韓国の方は、立春、立夏、立秋、立冬から約1か月遅れた時点で四季を認識している。つまり、韓国の四季の認識には、立春、立夏、立秋、立冬のような暦上の四季区分にはあまり捉われていないと言えよう。

日本も韓国も1年を24等分した24節気で1年の季節を示して、その中の立春、立夏、立秋、立冬が四季を区切る時点になるという概念は古来から伝統的文化として強く影響を与えて来た。この暦上の節気は、実際の気候から見ると、かなり早い

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
日本	川端康成			3月初め		5月中旬			8月10日頃			11月中旬	
	夏目漱石	立春		3月中旬	立夏	5月初め		立秋		10月初め	立冬		12月初め
韓国	黄順元			3月中旬			6月末			9月初め			12月初め
	金東仁				桃の節句		端午			秋夕			12月初め

時点で位置している。それ故、概念的にはその時点で季節が変わったと思っても体感的感覚では実感できない。しかし、日本の季節認識は、概念的な暦上の区分に基づい

て季節認識をする一方、韓国は概念的な暦上の区分よりは体感的に実感できる時点でその季節を認識している。この両国の季節認識の相違が、上の表で示す1ヶ月弱のずれを生んだのである。

同じく24節気に基づいた季節観を文化の基本に持ちつつ、両国の作者が示したこの違いはどこから来たのであろうか。もし、それが地理的位置の違いから来るものなら、春と夏の認識が日本の方が韓国より早くなることは理解できても、秋と冬の認識もが早くなることは説明できない。この時間的認識の相違は単なる地理的、気候的なものがその原因ではないと思われる。この認識の相違は、両国の文化的背景が投影された結果ではないかと思われる。その理由を二つの面から考えてみたい。

まずは、日本には『歳時記』という俳句の<経典>があることである。この『歳時記』は、長い間培われた日本の季節観の神髄のようなものであろう。この『歳時記』の四季区分は暦上の節気にもとづいていることは確かである。しかし、日本人の季節認識は、暦上の節気を意識して季節を認識するというより、この『歳時記』に支配された季節認識と言った方がいいだろう。このような<規範とすべき>季節観が存在する日本ではリアリズムに基づいた表現を目指す近代文学においても、その『歳時記』の影響力は無視できないものである。一方、韓国にも『歳時記』はある。しかし、それは文学の世界のものというより、民俗のものである。だから、韓国の文学には、日本のような<規範とすべき>季節は存在していない。その時、実感で感じ取る<体感的季節認識>が優先されるのは同然かも知れない。

2番目は、近代における日本と韓国の、暦の相違をあげることができる。つまり、日本は24節気は太陰太陽暦を用いて、節句は太陽暦を用いている。韓国は節気も節句も太陰太陽暦を用いている。そ

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	
日	1	4	3 20	5	5	5	7 13 23	5 7 12	15	11 23	7
日本	正月	立春	桃の節句	彼岸	端午の節句	立夏	七夕	立秋	お盆	彼岸の中日	立冬
韓国	正月	立春		桃の節句	立夏	節午の節句	初伏 中伏	七夕 立秋 末伏	秋夕		立冬

れ故、両国の間の節句の時期は約1ヶ月ずれている。この節気と節句を、日本と韓国でそれぞれ用いられている順で並べて見よう(1992年の暦による)。

節気が観念的な季節感だとすると、節句は生活そのものの季節感である。それぞれの節句にはそれぞれの季節感が付随する。その節句は日本の方が、韓国より常に1ヵ

月早く訪れる。そして、節気と時期的に接近している。例えば、＜端午の節句＞を見てみよう。日本は太陽暦＜5月5日＞で、＜立夏＞と一緒に来ている。一方、韓国は、太陽暦＜6月5日＞、＜立夏＞から1ヶ月後である。古来から＜端午の節句＞の季節感は夏である。日本は、＜立夏＞という＜歳時記的季节＞と＜端午＞という＜生活的季節＞が同じ時期に並んでいる。観念的にも生活的実感からも、この時点で＜夏＞が認識できよう。川端も漱石もこの時期において夏を認識している。韓国は、観念的な夏の始まり、＜立夏＞の時点では実感できなかった夏が、1ヶ月という時間が立つことで体感的にも夏が認識でき、それに＜端午の節句＞の生活的感覚もが加わって、この時点で黄順元も金東仁も、夏を認識しているのである。

このように、日本は太陽暦の節句を用いることで、韓国より1ヶ月先にその節句が持つ生活的季節感を味わうのである。そして、その時期は、＜歳時記的季节認識＞の季節区分とも時間的に合致する。つまり、この太陽暦の節句は、観念的な＜歳時記的季节認識＞を生活的感覚で実感させ、＜歳時記的季节認識＞をより確固たるものとバックアップしているのではないだろうか。一方、韓国は、太陰太陽暦の節句を使用することで、＜体感的季節認識＞と節句の生活的季節感とが合致し、日本より1ヶ月遅れた時点でそれぞれの季節を認識しているのである。

両国とも24節気による季節認識は文化的に根強い。それを、日本は『歳時記』という存在と、太陽暦の節句を使用することで、近代においても24節気の四季区分である立春、立夏、立秋、立冬の時期にそれぞれの季節を認識することができた。一方、韓国は、日本ほど『歳時記』の影響が徹底していないので、＜体感的季節認識＞をし、その感覚が、太陰太陽暦の＜桃の節句＞＜端午の節句＞＜秋夕＞とが結びつくことで、観念的季节区分である、立春、立夏、立秋、立冬の時点より、体感で実感できる＜桃の節句＞＜端午の節句＞＜秋夕＞の時点でそれぞれの季節を認識するようになったのではないだろうか。その結果、日本と韓国の、季節認識の間には1ヶ月弱の時間的ずれが生まれたと思うのである。

この四者が示した季節感は、現今の日本人、韓国人の季節観をも代弁していると思われる。この季節認識の時間的ずれは、日本人と韓国人の、日常生活における季節の認識においても様々な所で指摘できよう。

それでは、両国が同じく太陰太陽暦を使用していた近代以前にはどうようであったのだろうか。今後の課題にしたいと思う。